講演　男と女のあかつき

――卒業研究の一方法――

大谷雅夫

一、古典作品の、さまざまな時代の注釈書の解釈を比べてみよう。

二、『万葉集』の例。藤原鎌足が鏡王女を「娉」した時に、王女が鎌足に贈った歌、「玉くしげ覆(おほ)ふをやすみ明けていなば君が名はあれどわが名し惜(を)しも」。

三、『古今集』の例。壬生忠岑の「題しらず」の歌、「有明(ありあけ)のつれなくみえし別(わか)れよりあかつきばかりうきものはなし」。

みなさんの卒業研究の一方法として、古典作品の注釈書を比較することをお勧めしたい。

たとえば、「あかつき」の思いを詠った男と女の歌について、昔から今までに作られた数多くの注釈書の解釈を比べてみる。上の二首とも、後朝の別れを男女が悲しく詠った作と読まれる一方で、言い寄る男を女が冷たく拒んだ時の歌とも解釈されている。

鏡王女の歌は、題詞に用いられる「娉」字が求婚する意であることから、求婚をうけた女がそれを拒絶した作であることが分かる。反対に、女に振られた歌と理解されることの多い忠岑の作は、「別れ」の語から、逢うての後の離別の悲しみを詠ったものと解釈されなければならない。

注釈書を比較することは、そのような正解を求める手段であると共に、たとえば女の拒絶をやさしい女心と誤解する注釈にその時代の女性観が明らかになるなど、思わぬ発見をもたらすことがある。解釈の相違を入り口にして、古典の心と、それを享受する人々の心と、それぞれに近づく一方法である。

一、

「男と女のあかつき」とは、また大変な題をつけてしまいました。……あんまり期待してもらっては困ります。

昔、私の学生時代にはやった歌に、「夜明けのコーヒー、ふたりで飲もうと、あの人が言った、恋の季節よ」（岩谷時子作詞、いずみたく作曲「恋の季節」）という文句がありました。ピンキーとキラーズといういかにも昭和な名前のグループが歌いました。

「あかつき」は、その「夜明け」には近いけれども、まだまわりは暗いというころです。「恋の季節」ではありませんが、やはり男と女の恋愛、あるいは婚姻にとって重要な意味をもつ時間でした。

今日は、『万葉集』と『古今集』の「あかつき」の歌を読んでゆきます。『万葉集』の時代には、「あかつき」は「あかとき」と言いました。

その二首を取りあげるのは、古代の男女の恋愛について語ろうというのではありません。そんな洒落た話はできません。「卒業研究の一方法」というやぼったい副題が付いていますが、こちらの方が本当のところです。

みなさんは、これから卒業論文をお書きになる。論文なんて、たぶん今まで書いたことがないでしょう。たいていの人がそうです。初めての論文だから、何を問題として、どんな方法で書けばいいか、分からない。

五十年前の私も、もちろんそうでした。私の卒業論文は、紀貫之の歌の「見たて」の技法を論じたものでした。たとえば、雪が降るのを花が散るよと詠い、逆に花が散るのを雪が舞うようだと言う。それが「見たて」の表現です。一生懸命に書いたはずですが、卒論試問では、先生に「方法が幼い」と指摘されました。そう評価されても仕方のない出来の論文でした。

その論文の準備をしていた頃の自分に、もしも今の私がアドバイスできるなら、こういう方法もあるんだよと教えたい。そんな気持でお話しします。それが、今まさに卒論をどうするか気にしているはずの皆さんの参考になれば、と願っています。

方法と言えば、なんとか論とか、なんとか主義とか言って難しいものじゃないかと、みなさん、ちょっと身構えてしまうでしょうか。しかし、私が紹介したい方法、というかやり方は、いたって単純、素朴なものです。作品を読むのに、注釈書を比較してみることです。これは数多くの注釈が出ている古典作品にしか出来ないことかも知れませんが、注釈書をいくつか、たとえば図書館の大机の上に並べて、比べてみる。そうすると、解釈がずいぶん違うことに

気が付きます。人によって違う。時代によって違う。いろんなケースがありますが、読み方がそれぞれ違うことが分かります。

みなさん方は『万葉集』にしろ『古今集』にしろ、昔からたくさんの偉い学者が研究してきて、今はなにもかも分かっている。新しい問題なんか見つかりっこないと、勉強する前からそう思いこみ、立ちすくんでしまうことがあるかも知れません。しかし、そんなことはありません。注釈書によって解釈がぜんぜん違う。みな本当のところはよく分かっていないのです。だから解釈が違うのです。そして、少なくとも、その解釈の違うところに、問題は確実に残されている。それらの問題は、今も私たちに解明されることを待っているのです。

現代の注釈書が正しいという保証はどこにもない。逆に、昔の注釈書がいいということもない。とにかく解釈が違う。その違いが、『万葉集』の世界へ、また『古今集』へと、私たちを導く入り口になるのです。

二、

最初に取りあげるのは『万葉集』の有名な歌です。仮に岩波文庫の本文によって引きますが、題詞はあえて訓読せず、返り点だけを付けて示してみます。

巻二・九三、九四

内大臣藤原卿娉二鏡王女一時、鏡王女贈二内大臣一歌一首

玉くしげ覆ふをやすみ明けていなば君が名はあれどわが名し惜しも

内大臣藤原卿報二贈鏡王女一歌一首

玉くしげみもろの山のさな葛さ寝ずは遂にありかつましじ

或る本の歌に曰く、「玉くしげ三室戸山の」

天智天皇の時代、近江の大津に都のあった七世紀半ば、鏡王女という女性と藤原鎌足が詠みかわした作です。その最初の歌、女が男に与えた歌を、今日は読んでみます。

「玉くしげ覆ふをやすみ」の「くしげ」は、女性が櫛や化粧道具をいれておく箱のことで、「玉」はそれをほめる言葉です。「覆ふをやすみ」は、その「玉くしげ」を蓋をして覆うのは「やすみ」、やさしいので蓋を開けてという意味で、（夜が）「明けて」という言葉を導きます。つまり「玉くしげ覆ふをやすみ」は、歌全体の意味には直接関わらない序詞です。すると、歌の意味としては、「明けていなば君が名はあれど我が名し惜しも」、つまり、夜が明けてから「いなば」、あなたが帰って行くなら、あなたの名前はあっても（お名前に傷はつかないでも）、私の名前、評判が損なわれるのが惜しい、となります。

つまりはどういうことでしょうか。

近年の注釈書の解釈はほとんど同じですから、分かりやすい三つを選んで引用してみます。

㋐日本古典文学大系『万葉集一』（一九五七年）

［大意］お泊まりになって夜が明けてから帰られるならば噂が立つでしょうから、あなたの名はともかく、私の名が惜しく思われます。

㋑日本古典文学全集『万葉集一』（一九七一年）

○明けていなば―夜が明けてお帰りになったら。明ケテは玉クシゲの縁語。当時のツマドヒは、男が夜訪問し、翌朝のまだ暗いうちに帰って行くのが習わしであった。

㋒伊藤博『万葉集釈注一』（一九九五年）

鏡王女の歌は、わざと、相手をないがしろにして自分だけを重んじた物言いに興じ、相手の反応をうかがったもの。一夜が明けても長くいてくれるのは嬉しい。だが、その嬉しさを秘めて甘えているわけである。

三つとも、結局は、同じ解釈であることがお分かりでしょうか。「後朝」という漢字をあてる「きぬぎぬ」という言葉をご存じと思います。共寝したあと、男女がそれぞれ自分の「きぬ」、衣服を身につけて、男は女の家を出てゆく。女は男を見送る。それを後朝の別れと言います。この三つの注釈は、どれも、その別れの時に女が作った歌だという解釈をとっています。

㋑の「当時のツマドヒは、男が夜訪問し」云々は、当時の婚姻制度が、男が女の家に通うことによって成立したことを述べて、この歌も、そのような習わしにおける後朝の作だと言うのです。㋒の注釈の「一夜が明けても長くいてくれるのは嬉しい」云々も、男が、別れにくさにいつまでもグズグズしている、その気持は嬉しいけれども、明るくなってからお帰りになったら人に見られて噂がたつ。そうなると、あなたはいいでしょうが、女の私は困るわと、わざと男を軽んじた言い方をして戯れ、甘えるのだと言っています。これも後朝説です。㋐の大意も同じです。

現代のこの歌の注釈は、後朝の歌という解釈で一致しています。そのような注釈書ばかり調べていると、この歌には何の問題もないように思われます。

しかし、それ以前の注釈と比べてみればどうか。私が、注釈書を比較する方法と言うのは、中世から現代まで、すべての時代の注釈書を広く比較することです。

この歌の注釈が見られるのは近世以後の注釈書です。

現代の注釈書を見たところですから、続いて近代から近世へと、時をさかのぼって見ていきましょう。

近代には次のような注釈が刊行されました。長文ですが、

傍線の部分に気を付けて読んでみましょう。以下、引用文の中の漢字に私が勝手に振仮名を付けることがあります。読み違いもありましょうし、もとからあった振仮名と区別しにくいこともありますが、それはお許し下さい。

㋓金子元臣『万葉集評釈』第一冊（一九三五年）

［評］娉ふといふ行為は古代の婚姻風習に於ける普通の過程であつて、男が女の家に往つてその慇懃の情を通ずるをいふ。女の家では勿論初から男を家内には入れぬので、男は庭や墻の外をうろ〳〵して、出入する家人を捉へて消息を頼んだり、今少し伝があつて立入ると、簾の外や何かに陣取つて、召仕の女中に取次をして貰つたりして、執念くせがむのである。……

さてその熱心さは憎くもないが、夜が明けてから帰られたのでは、恰も鎌足にその一泊を許したやうな形に見えて、痛くもない腹を世間からは探られる訳だから迷惑千万、そこで「あが名し惜しも」と、鏡女王は歎声を洩した次第である。

㋔近藤芳樹『万葉集註疏二の上』（一九一〇年）

○歌意。次の和歌によりて思ふに、鎌足の女王の許に来玉へれど、内に入らるゝ事をば許し玉はで、明がたまでも戸外にたゞずみ玉ふを、女王わびしくおもほして、早く帰り玉へとのたまふ……君は男にてませばかゝる密通も常なれば、名のたつをも厭ひ玉ふまじけれど、吾は女にしあれば、実事も無きに名のたつはいと〳〵惜しとのたまへるなり。

さきほどの後朝説とは違うことにお気付きになったと思います。㋓の傍線部には「女の家では勿論初から男を家内には入れぬので」と、また㋔にも「内に入らるゝ事をば許し玉はで」とあります。鎌足は家の中に入れてもらえなかったと言うのです。また㋔には「実事も無きに」とあります。「実事」とは、いわゆる男女関係、共寝することです。つまり、どちらも、女は男を寝室はもとより、家の中にも入れず、求婚を拒み通した。もちろん「実事」、いっしょに寝た事実などない。そして、あなたが夜明けまでそこに居座って、明るくなってから帰ると、あたかも二人がともに夜を過ごした、夫婦の関係にあると人に誤解されかねないので、さっさと帰ってちょうだいと要求した歌と解釈したのです。

現代の通説と、とんでもない違いがあったのです。

では近世はどうか。㋔の近藤芳樹が大きな影響を受けたとされているのが江戸時代末にできた㋕の注釈です。これも傍線部に注意して読んでみましょう。

㋕鹿持雅澄『万葉集古義』（一八五八年以前成立）

こは鎌足ノ大臣の、此女王の許に通ひ給ひて、余りに

別を惜みて、夜更れども帰りがてに為給ふを、人目をはゞかりおもほして、心ならねど、強てとく返り給はねとはげまし催しやりたまふなるべし、

これは、明らかに後朝の歌説です。㋔とは違います。

さらにさかのぼります。次の㋕は、江戸時代前期の契沖の『代匠記』初稿本です。

㋕契沖『万葉代匠記』（初稿本・一六八四年〜八八年）

わかれをおしみて、しばし〳〵とためらひ、夜の明はて、帰り給はゞ、君が名のたゝん事のおしさもさることなれども、我はたをやめにて、いとゞ人にいひさはがれん事のわびしく、それによりては、又あひがたき事のいできなどもすべければ、行末ながくと我をおもひたまはゞ、わかれはいとかなしけれど、あけぐれのまぎれに帰りて、又こそきまさめとなり。

これも後朝の歌説です。そして、注意していただきたいのは、ここに読みとられている女心が、実にやさしげなことです。「行末ながくと我をおもひたまはゞ、わかれはいとかなしけれど」と、添い遂げようと思ってくださるのなら、今お別れするのは悲しいことですが、人に気づかれないようにどうぞお帰り下さいと男に懇願しているのです。

「迷惑千万」「早く帰り玉へ」とは大違いです。

契沖は学者としてすばらしい業績を残した人ですが、女性をちょっと理想化しすぎるきらいがあります。女を思いやりの深い、やさしい心のもちぬしと考えがちです。その傾向が極まったのが、彼がこの初稿本を数年後に作り直した代匠記精撰本の㋖の注釈です。

㋖『万葉代匠記』（精撰本・一六九〇年成立）

今按、六帖（これは『古今和歌六帖』という平安時代の歌集です。万葉集の歌を数多く載せるもので、問題の歌も入っています）ニ此下句、我名ハ有トモ君ガ名惜モトアリ。……人ヲ先ニシテ吾ヲ後ニスルハ道ナレバ、古本ハ、上ハ吾、下ハ君ナリケルヲ、今ノ本誤テ引替タルカ、然リトモ、ワガナハアレドキミガナシヲシモト読ベシ。

たしかに『古今和歌六帖』第五「名ををしむ」には「かがみの王女」の歌として、

たまくしげおほふをやすみあけたらばわが名はありとも君が名をしも

とあります。

この精撰本でも後朝の歌という説は同じなのですが、「今案ずるに」、と考え直して、傍線部のように、人のことを先に考えて、自分は後回しにするのが人のあるべき生き方なので、「古本」（残存しない『万葉集』の原本）では、今の本の「君が名はあれど我が名し惜しも」のところ

は「我が名はあれど君が名し惜しも」だっただろうと推測するのです。つまり、女が男の立場を気づかって、私に噂が立つのは構わない。けれども、あなたのご評判に傷が付くことが心配なのですという形が『万葉集』のもともとの歌だった。その言葉がひっくりかえって「君が名はあれど我が名し惜しも」という利己的にも見える言葉に変わってしまった。『古今和歌六帖』にその古い形の本文が残されている。そこにちゃんと証拠がある、と言うのです。

そして、この説は、江戸時代から明治にかけての多くの万葉集読者が使った橘千蔭（たちばなのちかげ）『万葉集略解（りゃくげ）』（一八〇〇年成立）という注釈書に採用されて、江戸時代の通説となりました。

以上のことを簡単にまとめてみます。

この鏡女王の歌は、江戸時代には後朝の歌と読まれた。それも「我が名はあれど君が名し惜しも」という本文が元来のものと想像されて、夫のことを思いやる、やさしい女心を詠うものと理解されることが多かった。

ところが、近代になって、女が男の求愛を拒否して、明るくなってから出て行かれたらこちらが迷惑と、男を冷たく追い払おうとする歌とする解釈が出た。

しかし、今日は、どの注釈書も同じ後朝の歌という解釈に戻る。

そのような解釈の変遷がありました。

大きく、二つの説が対立しています。「実事」という言葉を使えば、この歌の前に実事があったか、なかったか。それをどちらに見るかの違いで、この歌の作者は㋒「嬉しさを秘めて甘えている」とも、また、㋓「迷惑千万」、さっさと帰ってちょうだいと要求しているとも考えられます。とんでもない違いがあるのです。

困ったことに、このような解釈の相違があったにも関わらず、現代の万葉集注釈書には、それを問題として取りあげ、考察するものがありません。㋐㋑㋒の他、私たちが普通に手に取る注釈書は、近代の解釈㋓㋔を完全に無視しています。現代の注釈書と江戸時代の注釈書だけを見ていると、この歌の解釈に問題があることに気が付きません。

だから、注釈書は時代を通じて、ひろく見ないといけないのです。

では、鏡女王の歌は、どう解釈すべきなのでしょうか。面白い問題でしょう？

これは、ぜひともみなさんに考えていただきたい。来週までの宿題にしましょう。卒業研究のテーマにしてくださいと、ここで帰ってしまった方が本当はいいのかも知れません……。

しかし、そうもいきませんので、私の考えを簡単にお話

しします。結論を先に申しますと、私は拒否説が正しいと考えています。

次の井上通泰『万葉集新考』の注釈をご覧下さい。これが根拠を挙げて、実事なしの解釈を示しています。井上さんは、ご存じの民俗学者、柳田国男のお兄さんです。

㋖井上通泰『万葉集新考』第一（一九二八年）

○契沖（の㋕の説）は六帖に此歌を載せてワガ名ハアレドモ君ガ名ヲシモとしたるを引きて「古本は上は吾、下は君なりけるを今の本誤て引替たるか」と云へれど、此歌は題辞に娉二鏡王女一時とあるを見（下にも娉と娶とを別てり）、又答歌の調を見ても、女王の未鎌足に靡き給はぬ程なれば、我名ハヲシカラネド君ノ名ガヲシイといひたまふべくもあらず。さればもとのまゝにてあるべし。古義、美夫君志に女王の靡き給ひし後の歌とせるは誤なり。

簡潔すぎて、分かりにくいと思いますが、その結論は、資料㋕の『万葉集古義』や、また木村正辞『万葉集美夫君志』という注釈書が、女が男に靡いたあとの、つまり結婚したあとの歌とするのを否定して、まだ靡かない、男女関係を結んでいない時の（拒否の）歌だとするのです。その根拠が傍線部のところに二つあげられています。

その理由の二つめから見ると、それは傍線部の「又答歌の調を見ても」、つまり、この歌に応えた鎌足の歌の口調を考えてみれば、ということです。

鎌足の歌をもういちど引用します。こんどは題詞を訓読します。

内大臣藤原卿の、鏡王女に報贈せし歌一首

玉くしげみもろの山のさな葛さ寝ずは遂にありかつましじ

この歌の「玉くしげ」から「さな葛」までは、「さ寝ずは」を導く序詞です。「さ寝ずは遂にありかつましじ」、あなたと共寝しないでは、とても生きていられないという訴えの歌です。

こんな歌を、実事があった後に詠うはずがありません。共寝できなかったからこそ、「さ寝ずは」と、仮定形で言うのです。つまり、この「あかつき」には、鎌足は、女に拒否されていた。それが、鎌足の答えの歌から分かると言うのです。

井上さんの拒否説のもう一つの根拠は、傍線部の最初です。題辞に「娉二鏡王女一時」とあるが、『万葉集』ではその「娉」と「娶」とには使い分けがあるということです。

つまり、こういうことです。「娉」と「娶」という文字が『万葉集』の婚姻に関わる歌の題詞に用いられている。二つは、見たところよく似た場面に出てくる文字だけれど

も、その意味は違っているのです。

六朝梁の顧野王の作った『玉篇』という字書があります。それには、

娉、娶也。

と、「娉」は「娶」と同じ意味だと述べています。

そして、同じ字書には、

娶、取婦也。

ともあります。「娶」は妻をめとること。としますと、「娉」も当然、妻をめとるの意味になります。

しかし、さらに古い時代の字書、『説文解字』（漢・許慎）には、

娉、問也。

娶、取婦也。

とあります。これによるなら、「娶」はやはり妻をめとることですが、「娉」は「問」だと言います。中国では、男が女の家に通うのではなく、女が男の家に嫁ぐ形の嫁取り婚が行われました。ですから、この中国の文字の「問」は、男が女の家を訪うことではない。仲人が女の家を訪問して、婚姻の申し入れをすることです。つまり、「娉」はプロポーズの意です。「娉」すなわち求婚があって、「娶」すなわち娶ること、婚姻が成立するという順序です。二つの文字は、婚姻の異なる段階を意味することになります。

しかし、字書を見るよりも、井上さんが「下にも娉と娶とを別てり」と言うように、万葉集の題詞や左注の漢文の中で二つが違った意味に用いられていること、それを確認することのほうがより重要です。

『万葉集』の題詞で「娶」はどのように用いられているか。その例は、手近なところ、問題の鏡王女と鎌足二人の歌の次にあります。鎌足が天智天皇に仕える采女安見児を手に入れた喜びをうたうこれも有名な歌の題詞です。

巻二・九五

内大臣藤原卿娶二采女安見児一時作歌一首

われはもや安見児得たり皆人の得がてにすといふ安見児得たり

安見児を妻に得て、共寝をしたあとの得意満面の歌です。題詞の「娶」という文字は、結婚したという意味に違いありません。メトルと読めるものです。

では、「娉」の文字はどうか。右の歌のさらに次に置かれた歌の題詞にそれが見えます。

巻二・九六

久米禅師娉二石川郎女一時歌五首

みこも刈る信濃の真弓わが引かばうま人さびて否と言はむかも　禅師

五首連作の最初のこの歌は、信濃国の真弓を引くように、

私があなたの心を引くなら、あなたは「うま人」、貴婦人ぶって「厭よ」と断るだろうかと詠うのです。プロポーズしたらお断りになりますか、です。その「娉」がメトルではなく、求婚する意味であることは明らかです。

『万葉集』の題詞や左注の漢文には、他に次の四例の「娉」があります。

①巻二・一〇一題詞

大伴宿祢娉二巨勢郎女一時歌一首

玉葛実成らぬ木にはちはやぶる神そつくといふ成らぬ木ごとに

②巻三・四〇七題詞

大伴宿祢駿河麻呂娉二同坂上家之二嬢一歌一首

春霞春日の里の植ゑ小水葱苗なりと言ひし柄はさしにけむ

③巻四・五二八左注

大伴郎女和歌四首

千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば

右郎女者、佐保大納言卿之女也。初嫁二一品穂積皇子一。被レ寵無レ儔。而皇子薨之後時、藤原麻呂大夫娉二之郎女一焉。郎女、家二於坂上里一。仍族氏号曰二坂上郎女一也。

④巻十六・三七八八題詞

或曰、昔有二三男一。同娉二一女一也。娘子嘆息曰、一女之身、易レ滅如レ露、三雄之志、難レ平如レ石。遂乃彷二徨池上一、沈二没水底一。於レ時其壮士等、不レ勝二哀頽之至一。各陳二所心一作歌三首　娘子字曰二縵児一也

一つ一つ内容を詳しく検討すべきですが、今は、わかりやすい④の例だけを見ましょう。傍線部は「昔、三人の男がいた。ともに一人の女に求婚した。」という意味になります。三人の男が同時に一人の女を妻にはできません。この「娉」は、どうしても求婚の意になります。この題詞は、三人の男に同時にプロポーズされて、かわいそうに、困りきって自ら死んでしまった乙女の話を語るのです。

いっぽう、「娶」の文字はさきほどの安見児の例のほかに六例あります。

①巻二・九〇左注

卅年秋九月乙卯朔乙丑、皇后遊二行紀伊国一、到二熊野岬一、取二其処之御綱葉一而還。於レ是天皇伺二皇后不レ在、而娶二八田皇女一納二於宮中一。時皇后到二難波済一、聞二天皇合二八田皇女一、大恨レ之云々。

②巻二・一二三題詞

三方沙弥娶二園臣生羽之女一、未レ経二幾時一、臥レ病作歌三首

たけばぬれたかねば長き妹が髪このころ見ぬに掻き入れつらむか　三方沙弥

③巻四・五三五左注

しきたへの手枕まかず間置きて年そ経にける逢はなく思へば

右、安貴王娶二因幡八上采女一、係念極甚、愛情尤盛。於レ時勅断二不敬之罪一、退二却本郷一焉。于レ是王意悼怛、聊作二此歌一也。

④巻四・五三六左注

門部王恋歌一首

飫宇の海の潮干の潟の片思に思ひや行かむ道の長手を

右門部王任二出雲守一時、娶二部内娘子一也。未レ有二幾時一、既絶二往来一。累月之後、更起二愛心一、仍作二此歌一、贈二致娘子一。

⑤巻九・一七六七題詞

抜気大首任二筑紫一時、娶二豊前国娘子紐児一作歌三首

豊国の香春は我家紐児にいつがり居れば香春は我家

⑥巻十八・四一〇六題詞

教二喩史生尾張少咋一歌一首　并短歌

……両妻例云、有レ妻更娶者徒一年。女家杖一百。

離レ之。

これも一つだけ、分かりやすい例で見ると、最後の⑥は、都に妻がありながら出張先で土地の女を娶った男を、「両妻例」すなわち二人の妻を同時にもつことは重い罪だとする法律を示して叱責した文です。つまり、その「娶」は婚姻を結ぶことです。他の五例の「娶」も同じです。

井上通泰『新考』が「下にも娉と娶とを別てり」と言ったのはこのことです。「娉」は求婚する意、「娶」は婚姻を結ぶ意と、『万葉集』では明確に使い分けられる。「娉」は、女が男に靡くまえ、実事のまえ。「娶」は、靡いたあと、実事のあったあとに用いられる。この歌の題詞は「娉」ですから、現代の多くの注釈書、また江戸時代の契沖などの後朝説は成立しないのです。

鏡王女の「玉くしげ覆ふをやすみ明けていなば君が名はあれど我が名し惜しも」という歌は、あなたはいつまでそこに居るのです。いくらプロポーズをしても無駄です。明るくなってからあきらめて帰っていかれると、何かあったかと、つまり実事があったかと人に疑われます。そんな評判が立ったら、男のあなたはいいでしょうが、女の私は困るのよと、男の求婚を手きびしくはねつけたものになるのです。

もっとも、伝記の上では、鏡王女は天智天皇の妻の一人であり、後に鎌足の妻になります。結局は王女は鎌足に靡いたのです。しかし、それはこの歌のあとのことです。

契沖の『代匠記』精撰本が指摘したように、平安時代の『古今和歌六帖』にはこの歌は「わが名はありとも君が名をしも」という形で収められています。なぜ「我」と「君」がひっくりかえったのか。それはそれで、別の面白い問題です。私は、その本文の変更は、平安時代の和歌では、「あなたはいいでしょうが、私が困ります」というような自己中心的な、利己的な心を詠うことが少ないことから生まれたのではないかと考えています。それが全くないわけではないにしても、平安の歌人たちはエゴの表現を好まなかった。特に女性にはやさしさを期待し、温和な心をみやびなものとしたのだろうと思います。

次の『万葉集』の歌をご覧下さい。左注には、紀皇女という女性が、親にかくれて高安王という男と関係を結び、それが露見して叱責された時に作った歌だと言います。その時、あろうことか、馬に乗った男がノコノコやってきたのです。

巻十二・三〇九八

おのれゆゑ罵らえて居れば青馬の面高夫駄に乗りて来べしや

右の一首は、平群文屋朝臣益人伝に云く、「昔聞くならく、紀皇女窃かに高安王に嫁ぎて嘖まれし時に、この歌を御作りたまひき。但し、高安王は左降して伊予の国守に任ぜられしなり」といふ。

男の気楽なようすに腹をたてたのです。『万葉集』の時代には、このように自分の恋人を「おのれ」と叱りつける女がいました。その歌を『万葉集』にも載せました。しかし、平安時代の和歌にはこんな歌はありません。江戸時代までずっとない。

女心を理想化しがちな例の契沖に至っては、この歌を紀皇女が男をののしった作かと解釈したあとで、「それにてはなさけなし。いまだよく心を得ず」（『代匠記』初稿本）と困惑を隠していません。それほどに、上代と中古以降の女性観、そして和歌が詠む男女の恋愛の世界は、大きく違ってしまっていたのです。

だから、鏡王女の歌も後に誤解された。『六帖』では本文が変えられた。それによって、契沖のような立派な学者も、㋖「ワガナハアレドキミガナシヲシモ」と、その歌を「なさけ」のある女の歌に作りかえてしまったのです。

三、

次にとりあげるのは『古今集』の恋歌三の巻に載せられた壬生忠岑の「題しらず」の歌（六二五）です。

有明のつれなくみえし別れよりあかつきばかりうきものはなし

『百人一首』（三〇）にも入った作なので、そちらで覚えている方も多いことでしょう。

さて、この名歌にも、解釈にたいへん大きな違いがありました。「あかつき」の前に、男と女のあいだに実事があったかなかったかという、例の、あまり上品とは言えない問題です。

『古今集』の注釈書を、こんどは、古いものから新しいものへとたどっていきます。

最初に示す『顕注密勘』は、平安時代の終わり頃に歌の家、流派というものが生まれた、その一つの六条家の顕昭の『古今集』の注に、それに対抗する御子左家の藤原定家が自らの考えを書き込んだ面白い注釈書です。『日本歌学大系』別巻五に収められている本文を引用しましょう。右四行が顕昭の注、一字落しで記されているのが定家の考えです。

㋐『顕注密勘抄』（顕昭注・定家密勘）

是は女のもとよりかへるに、我はあけぬとていづるに、有明の月はあくるもしらず、つれなくみえし也。其時より暁はうくおぼゆともよめり。只女にわかれしより、あかつきはうき心也。

つれなくみえし、此心にこそ侍らめ。此詞のつゞきは不レ及えむにをかしくもよみて侍かな。これ程の

歌ひとつよみいでたらむ、この世の思出に侍べし。

まず、顕昭の注を読んでみましょう。「是は女のもとよりかへるに」、男が女の家から帰る時に、「我はあけぬとていづるに」、夜が明けた、人目につかぬように帰ろうと思って家を出たのに、「有明の月はあくるもしらず、つれなくみえし也」、この「有明の月」とは、明け方になっても空に残っている月です。十五日の満月の頃を過ぎて、月の出が遅くなり、沈むのもその分遅くなって朝になっても空に見える月です。その月が夜が明けたことも知らぬ顔に、「つれなく」（これがこの歌のもっとも重要な言葉です。要するにこちらの気持に共感しない、冷淡であることです。同情しないで、自分は無縁だという表情をしていることを言います）見えたのです。つまり、「有明の月はあくるもしらず、つれなくみえし也」は、月を擬人化した言い方で、有明の月が、空が明るくなったにもかかわらず、そんなこと関係ありませんという様子で、変わりなく空に見えたことを言います。自分は、女に心を残しながら、後ろ髪ひかれる辛い気持で夜明け前に家を出てきたのに、月の方は平気な顔をしていると、それをにくらしく、怨めしく見たという男の心の表現だと言うのです。そして、「其時より暁はうくおぼゆともよめり。只女にわかれしより、あかつきはうき心也」とは、その時以来、あかつきはつらく思うと

も詠んでいるが、要するに、女に別れたので、それからのあかつきが憂きものと思われるのだと解説しています。実は、これは兄の藤原清輔の『奥義抄』の解釈をそっくり受けつぐもので、六条家の家説でした。

そして、一字落としの定家の密勘のほうは、「つれなくみえし、此心にこそ侍らめ」と、その顕昭の解釈に賛成するものです。そのうえで、これほどの歌を一つでも詠めたら、歌人として一生の思い出になるだろうと絶讃するのです。

顕昭と定家、二人の読み方は、

一、男が女に逢い、あかつきになって女の家を出て、別れたこと。つまり、歌の前に一夜を共にすごした。実事があった。

二、「つれなく」見えたのは「月」だった。

この二点を特徴とします。

ところが、室町時代なかば、古今伝授の説として流布した注釈では解釈ががらりと変わります。

㋑『両度聞書』（東常縁・宗祇、寛永十五年刊本による）

つれなく見えしとは、あはずして返す人の心也。有明は久しく残る物なればそへたり。惣の心は、夜もすがら心をくだき、もしやとしゐて頼むに、人はつれなければ、力なう立わかれ行に、有明の月はほのかにて、心ぼそきあかつきのさま也。

つまり「つれなく見え」たのは、逢わないで男を帰らせる女の心だと解釈します。女が冷たく、逢ってくれないので、男が仕方なしに帰っていった時の歌だと理解するのです。

その読み方は、

一、男は女に逢ってもらえなかった。実事はなかった。

二、「つれなく」見えたのは「女」だった。

ということになります。

さきほどの顕昭、定家の解釈とは大ちがいです。

江戸時代になると、㋐と㋑、それぞれに賛成する注釈がでます。

契沖『古今余材抄』は、つれなかったのは月でもあり、女でもあると、㋐と㋑の説を重ねていますが、男は女に逢ったのか、逢えなかったか、実事があったか否かの解釈では、逢えなかった説、つまり女が拒否したという読み方を、根拠を示して述べます。まず『顕注密勘』の注を引用して、「しかれども」と、逆接で続けます。

㋒契沖『古今余材抄』（契沖全集八）

しかれども此歌あはずして明たるうた共の中にはさまれて侍り。六帖にも来れどあはずといふ題の所に此歌を出せり。つれなく見えしの心は顕注のごとく、月の貌の明るもしらぬ心にして、それにあはずしてかへす

人のつれなき体を相兼てよめる歌なるべし。万葉集第十三云、百不足、山田道乎、浪雲乃、愛妻跡、不語、別之来者、速川之、往文不知、衣袂笑、反裳不知云々。あはねどわかるゝ事はある也。

傍線部に、二つの根拠が示されています。一つは、「此歌あはずして明たるうた共の中にはさまれて侍り」。これは『古今集』の歌の配列を根拠とするのです。

『古今集』は、四季の巻は季節の推移に従って歌を並べる。同様に、恋の歌の五つの巻は、恋の進行を追って、噂を聞くだけで恋いこがれる歌から始まり、ちらっと姿を見て恋に落ちる歌、逢えない歌などを経て、最後には捨てられ、忘れられ、あきらめる歌へと、順に歌を配列します。

そのような構造になっていることを頭に入れて、次の『古今集』巻三の最初の十二首をざっとご覧下さい。『新編国歌大観』の本文に少しだけ漢字をあてて引用します。太字が問題の歌です。

『古今和歌集』恋三の巻頭十二首

616 起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめくらしつ
　　やよひのついたちよりしのびに人にものらいひてのちに、雨のそほふりけるによみてつかはしける
　　在原業平朝臣

617 つれづれのながめにまさる涙河袖のみ濡れてあふよしもなし
　　業平の朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける
　　敏之の朝臣

618 あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへ流ると聞かばたのまむ
　　かの女にかはりて返しによめる　業平の朝臣

619 よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき
　　題しらず　　よみ人しらず

620 いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ

621 あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともに消ぬべきものを
　　この歌は、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり　　業平の朝臣

622 秋の野に笹わけし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひちまさりける
　　をののこまち

623 見るめなきわが身をうらとしらねばや離れなであまの足たゆくくる
　　源むねゆきの朝臣

624 あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ　　みぶのただみね

625 有明のつれなく見えし別よりあかつきばかりうきものはなし　　在原元方

626 逢ふ事のなぎさにしよる浪なれば怨みてのみぞ立帰りける　　よみ人しらず

627 かねてより風にさきだつ浪なれや逢ふ事なきにまだき立つらむ

太字にしたこの歌の前後の作を見れば、先立つ二首には傍線を引いたように、623に「見るめなき」、624に「あはずして」という言葉があります。また、続く二首には、626に「逢ふ事のなぎさ」、627に「逢ふ事なきに」があります。つまり、このあたりは相手に逢えない歌が並べられているわけだから、これも同じ段階の恋の歌だというのが契沖の論理です。

先に『両度聞書』が問題の歌を「人はつれなければ、力なう立ちわかれ行」く意だと解釈したことを紹介しましたが、その『両度聞書』は、626の「逢ふ事のなぎさにしよる」の歌について、「（620の）『いたづらに行（ゆき）ては来ぬる』の歌より是（これ）まで七首は、あはで帰る恋也」と説いています。契沖はその考え方をそっくり引き継いでいたのです。

契沖が挙げた第二の根拠は、傍線部の「六帖にも来（く）れどあはずといふ題の所に此歌を出せり。」でした。『古今和歌六帖』は題ごとに、つまりその主題、内容ごとに歌を編集するものですが、この歌は「くれどあはず」、女の家に来たけれども逢えなかったという意味の題に入れてあるということです。

どちらも分かりやすい、確実な根拠のように感じられます。

しかし、契沖を学問の先輩としてたいへん尊敬していた本居宣長が、それに反対して、顕昭・定家の㋐と同じように、男女は逢ったという解釈をしました。実事ありと見たのです。

宣長の『古今集遠鏡（とおかがみ）』は『古今集』の歌を、江戸時代の俗語で翻訳したものです。傍線は、宣長が「歌にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり」（例言）と述べるように、歌の本文に表現されていない含意を補ったことを示す印です。（　）内の注と波線は私が付けました。

㋓本居宣長『古今集遠鏡』（本居宣長全集三）

○マヘカタ女ト暁ニ別レタ時ニ　有明ノ月ヲ見タレバシキリニアハレヲモヨホシテア、ノ月ハ夜ノアケ

ルノモシラヌカホデ　アノヤウニヂ゛ツトユルリトシテアルニ　オレハ夜ガアケレバカヘラネバナラヌ事トテ　ノコリ多イトコロヲ別レル事カヤト　身ニシミ〴〵ト思ハレタガ　其時カラシテ　ヨニ暁ホドウイツライモノハナイヤウニ思フ（ここまで歌の翻訳。以下は解説です）余材、上句を、あはずしてかへる意とせるは、歌の入どころになづめる、ひがこと也（『古今集』の配列にこだわってしまったための誤解だ）、顕注の如く、逢て別れたる也、然るをこゝに入たるは、ふと所を誤れる也、六帖も、此集（古今集）によりて誤れり、

宣長は、「顕注の如く、逢て別れたる也」と、顕昭の解釈に賛成しました。男女は一夜を共にすごして、朝になって別れたという読みです。そして、『古今集』は波線部「ふと所を誤」って、つまり、うっかり歌の配列を誤って逢わずに帰る歌の中に入れてしまった。『古今和歌六帖』も、『古今集』の配列を見て、間違って「くれどあはず」の題に入れた、契沖はその配列に拘泥して、歌の解釈を誤ったのだと論じたのです。

契沖と宣長、どちらも立派な偉い学者です。その二人が対立しました。

現代の学者はどうかと言うと、ほとんどが拒否説を取ります。契沖の配列論による解釈に従ったのです。二つだけ挙げておきましょう。

㋔松田武夫『新釈古今和歌集下巻』（一九七五年）

古注に、二つの解釈がある。一つは、女に会って、暁近くになって断腸の思いで別れようとしているのに、有明の月は、明けるのもしらぬ顔で、我につれないと解する（顕注・密勘・遠鏡）。もう一つは、会わずしてむなしく帰る心境を詠んだと解する（余材・打聞・正義・高尚）。後者が正解であることは、構造の上から言うまでもない。すでに、余材の指摘した通りである。

㋕片桐洋一『古今和歌集全評釈』中（一九九八年）

【語釈】○つれなく見えし別れより＝自分を受け入れてくれなかったなあ、やはり逢ってくれなかったなあと思わせる冷淡な別れをして以来。和歌の配列から見て、つれなく逢ってもらえずに別れたと見るべきであろう。

どちらも、歌の配列を根拠として、逢えなかった歌、ふられて帰る歌だと解釈します。

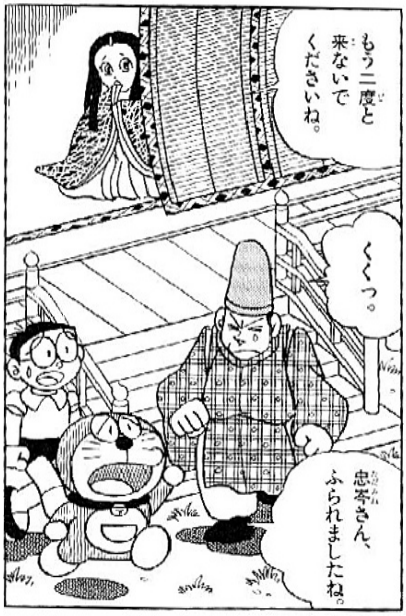
そして、その拒否説が今日の通説であることは、ご存じのドラえもんですら、そのように理解していることからも分かります。

㋖『ドラえもんのまんが百人一首』（一九九五年）

30

有明の　つれなく見えし　別れより
あかつきばかり　憂きものはなし

壬生忠岑



この歌の解釈の歴史をまとめてみます。平安時代終わりの顕昭と定家、そして江戸時代半ばの本居宣長は実事のあった後の「あかつき」の歌と読んで、「つれなく見え」たのは月だったと考えた。

いっぽう、中世の古今伝授説から江戸時代前期の契沖、そして現代の多数説は、男は女に拒否され、女に逢えないまま家を出た時の歌と考えた。「つれなく見え」たのは女である。「もう二度と来ないでくださいね」と女に言われ、「忠岑さん、ふられましたね」とドラえもんに同情された、そのような残念な片恋だったという解釈です。

どちらかが正しく、どちらかが誤りです。あるいは、どちらも誤りで他に正解があるという可能性もあります。

その正解を得ることにも、もちろん大きな意義があります。しかし、それよりも、このような問題を考える過程に、面白い問題が見つかることが多い。古典の世界に通じる入り口があるのです。そこから中に入ってみましょう。

㋕の『全評釈』の注の傍線部をもういちどご覧下さい。「つれなく逢ってもらえずに別れた」とあります。歌の「つれなく見えし別れ」を解釈するものですが、歌にはない「逢ってもらえず」という言葉を補っています。しかし、どうでしょう、日本語として、「逢ってもらえずに別れた」は、少し変に聞こえませんか。「別れた」のなら、その前に「逢っていた」のではないでしょうか。

たとえば、テレビドラマなどで、若い女友達どうしがこんな会話を交わす場面が考えられませんか。

「彼と付きあってんの？」

「別れた。」

質問に対して答えがちぐはぐなようにも見えますが、そんなことはありません。「別れた。」とは、「付きあっていたけれども、もう別れた」の意味です。ちゃんと答えになっている。会話が成立しています。「別れた。」とは、その前に逢っていたことを、それとは言わずに語る言葉です。

だから「逢ってもらえずに別れた」が変なのです。

『古今和歌集』の物名（ぶつめい）の歌に次のような作（四二九）があります。詞書の「からもものはな」はあんずの花のことです。歌の傍線部にその名前が詠み込まれていますが、それは歌の意味には関わりません。恋の歌です。

からもものはな　　ふかやぶ

逢ふからもものはなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば

契沖『古今余材抄』はこれに、

かねて別をおもひやれば、あふ時から猶かなしきと也。

と注しています。

つまり、いつか別れてしまうだろうことを、あらかじめ思うので、逢っている時から、うれしさよりも、むしろもの悲しいと詠うのです。

「逢うは別れの始め」という古い諺があります。逢った以上は、いずれ別れの時が来る。短く言えば、夕方に逢えば、必ずあかつきには辛い別れをしなければならない。藤原定家の「はじめより逢ふは別れと聞きながらあかつき知らで人を恋ひける」（拾遺愚草）はそのことを詠っていました。また、長い時間で考えても、生涯添いとげる男女はいるでしょうが、それでも二人にはいつか永別の時が来ます。「サヨナラ」ダケガ人生ダ（井伏鱒二）ではありませんが、人は、人に逢い、逢えば必ず別れるのです。それが「逢うは別れの始め」です。

その諺を逆に言ってみれば、別れの始めは逢うことです。逢わないと別れることもない。要するに、逢うことと別れることはひと続きのことです。逢ってこそ、別れがある。ですから、繰りかえしますが、「逢ってもらえずに別れた」が変なのです。

契沖『古今余材抄』の引用の後半に『万葉集』の長歌が引用してあり、そのあとに「あはねどわかるゝ事はある也」と述べています。

逢わずに別れることはあり得ないという、いま私が述べたような異論があることを予想して、逢わないでも別れることはあるのだと、その例をあげるのです。さすが契沖さん、考えが行き届いています。

その長歌は前後二段に分かれるもので、前半が旅立った夫の言葉、後半が妻の言葉という男女かけあいの歌です。契沖が一部を引いたその前半を読み下して示してみます。

『万葉集』巻十三・三二七六

百足らず　山田の道を　波雲の　愛し妻と　語らはず
別れし来れば　早川の　行きも知らず　衣手の　かへ
りも知らず　馬じもの　立ちてつまづき　せむすべの
たづきを知らに

契沖は、傍線部の「語らはず　別れし来れば」の「語らはず」を逢わなかったことと理解し、逢わずに別れたことを言う例としてあげたのです。

しかし、これは、旅に出た夫が、その前に妻となごりを惜しむ時間を持てなかったことを悔やむ表現です。たしかに旅立ちの前夜を妻とともにできなかった、逢わなかったのですが、妻とはもちろん、日常的に逢っていたはずです。その妻と、旅によって別れたのです。

そのように、旅に出た男が、妻や親などとなごりを十分に惜しめなかったことの後悔が『万葉集』の旅の歌にはよく詠われます。一例だけ紹介しておきましょう。

巻二十・四三三七（防人歌）

水鳥の立ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき

この防人の歌は、水鳥が飛び立つようにせわしく旅だち、両親にものを言う間もなく来たので、今になって悔まれると詠うのです。旅の別れの直前に、妻や親に逢いたかった、語りあいたかった。それができなかったと悲しむのが、旅の歌の一つの型です。契沖が「あはねどわかるゝ事はある」例として挙げた「語らはず別れし来れば」もそれです。その別れは普段なじみあっている夫婦のあいだの別れです。それと、求婚する男が女に逢えないまま、ふられて帰ることとは根本的に違うのです。

契沖は、古歌三千首を暗記していたとも伝えられる博覧強記の学者でした。その契沖があえてこのような無理な例を挙げたのは、「あはねどわかるゝ事はある也」と言うための適当な根拠を、他に見つけられなかったからでしょう。実際、そんな例はないのです。

問題の忠岑の歌に「別れより」とある以上、その前に男女が逢っていたことは確実です。別れの前に逢瀬があったのです。

では、契沖が「此歌あはずして明たるうた共の中にはさまれて侍り。」と指摘していることは、どのように考えるべきでしょうか。

『古今集』恋三の冒頭十二首の並びをもう一度ご覧下さい。さきほども見たように、この歌の前二首の傍線部には623「見るめなき」、624「あはずして」があり、あと二首にも626「逢ふ事のなぎさ」、627「逢ふ事なきに」がある。恋人に逢えない歌の並びにこの歌はある。だから、この歌も女に逢えないこと、ふられたことを詠った歌に、配列上

きっとなる。それが契沖の論理でした。

逢うことがないということは、もちろん今まで一度も逢ったことがないことを含みます。しかし、一度逢ったあと、そのことが女の親に知られ、厳重に監視された女と逢えなくなった場合もありましょう。また噂になったことを恥じた女が再びは受け入れてくれないということもありますし、また強引に関係を結んだものの次は女に警戒されて逢瀬をもてない場合もあると思います。いろんなことが考えられるのに、契沖はこの「見るめなき」「あはずして」「逢ふ事のなぎさ」「逢ふ事なきに」などをすべて未だ見ざる恋の表現と考えた。それは、すでに『両度聞書』などの古今伝授説もそうでした。そして、ともに、問題の「ありあけの」の歌もその類の歌と解釈した。その後の古今集注釈家のほとんどもそれにならい、この「つれなく見えし別れ」が逢えずに帰る意であることを、「構造の上から言うまでもない」（新釈）とか、「和歌の配列から見て、つれなく逢ってもらえずに別れたと見るべきであろう」（全評釈）としたのです。

しかし、歌は、まずは歌の言葉から解釈すべきものです。言葉より配列や構造を重んじるのは逆立ちした読解法だと思います。

たとえば、この巻の巻頭、616の業平の歌をご覧下さい。詞書に「しのびに人にものらいひてのちに」とあります。この部立を逢わない恋を詠うものとした契沖は、これも「只思ひ初たるよしをいひつかはすをいへる歟。又は物をいひかはせるなるべし」と論じました。つまり「ものらいひて」を、恋の思いを告げたこと、または語りあったこととしました。配列から、実事のなかった歌と考えたのです。しかし、それなら「しのびに」はどういう意味なのでしょうか。

『古今集』恋四・七四五に次のような歌があります。

親の守りける人のむすめにいとしのびに逢ひてものら言ひけるあひだに、親の呼ぶといひければ急ぎ帰るとて裳をなむ脱ぎおきて入りにける、そののち裳を返すとてよめる　おきかぜ

逢ふまでの形見とてこそとどめけめ涙に浮ぶもくづなりけり

「裳」を脱いでいたというのですから、この「しのびに逢ひてものら言ひける」とは、親に隠れて情事をかわしたことの婉曲表現です。

また、『後撰集』時代の歌人、藤原清正の家集『清正集』にも

いとしのびに語らひける女の親、異人にあはすべしといそぎけるをききて

我ならぬ人に解くなと結びおきし君が下紐ゆるすなるかな

とあります。親に知られないまま衣の下紐を解きあう仲になったことを「しのびに語らひける」と言ったのです。

この業平の歌も、同様に、ひそかに関係をもったあと、何らかの事情があって逢えないことが続いたので、「起きもせず寝もせで夜をあかして」と、眠れない夜を過ごすことを嘆いた歌と解釈されます。言葉から、そう読みとられなければならないと思います。

もう一つ例をあげてみましょう。これも業平の歌です。

622　秋の野に笹わけし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひちまさりける

これを普通に考えるなら、あなたの家から朝帰りした道の露で湿った袖より、逢えずに帰る夜の袖の方が涙で濡れまさっていますよの意に理解されます。かつては逢えたのに、今は逢えなくなってしまったことを悲しむ歌です。しかし、これをも契沖は未だ逢わざる恋と考えた。そして、その強い影響下にある現代の注釈者は、上句について、「女のもとから朝帰りしたことを言っているのである。その女は現在通いつめている女ではない」（全評釈）とか、「『笹分けし朝』は、別の女性との以前の関係」（角川ソフィア文庫）などと述べています。けれども、およそまともな恋の歌で、昔の別の恋人との関わりを言うことがあるでしょうか。そのような例は簡単には見つかりません。皆さんも、好きな人と話をしている時、昔の彼女が……とか、もとカレよりあなたの方が……とか、そんなことは口にしないものでしょう。しかも、これは、契沖らの解釈によれば、まだ逢ったことのない女に求愛する歌です。求愛の歌に、昔の朝帰りのことを詠うでしょうか。遊び人であることを自ら吹聴しますか。

そんな不思議な解釈が配列論から生まれているのです。

しかも、配列のとらえ方も、実は一つではありません。古今伝授説から、契沖、また今日の注釈書までのほとんどが、巻三の巻頭から問題の六二五を含む十数首を、男が女のもとに通って行っても逢えない場合の歌という把握をしています。しかし、知るかぎり唯一の例ですが、新日本古典文学大系『古今和歌集』（小島憲之・新井栄蔵）は、恋三の巻全体を「契りを結んで後になお慕い恋う恋　一三一首」として、さらに巻頭からの十八首に「逢うよしなしに」という小見出しを附けています。それは新井栄蔵「古今和歌集恋部の部立小考」（「国語国文」四三―六）の論から導かれた見方なのだろうと思います。作者の並べ方などを根拠にして、『古今集』の巻々を対立する構造にとらえるその新たな部立論は別に御覧になっていただきたいので

すが、その部立の考え方と、私が今まで考えてきた歌の解釈とは矛盾しないようです。右の『新大系』のこの歌の現代語訳を引いておきましょう。「月を残したまましらじらと夜が明けて行くありあけのころの、あの人が無情に見えたあのきぬぎぬの別れ以来、あかつきほどつらいものはない。」――これが正しい解釈だと思います。

繰りかえしますが、問題の625「有あけのつれなく見えし別れより」の歌が「別れ」を詠う以上、男が女に逢っていたことは確実です。「つれなく見えし別れ」と、ここには、過去のことを回想する気持を現す助動詞「き」の連体形「し」が使われています。つまり、逢って、別れたあかつきは、過去のことです。宣長『遠鏡』の訳が冒頭に「マヘカタ女ト暁ニ別レタ時ニ」とする通りです。かつてのあかつきの別れを苦しく回想しているのです。それ以来、逢えないでいる。それで、「あかつきばかりうきものはなし」と嘆くのです。この歌は前後の歌と何の不調和もなく、「契りを結んで後になお慕い恋う恋」の「逢うよしなしに」の心を詠ったものと理解できます。

宣長は『遠鏡』の解説部分で、『古今集』におけるこの歌の位置は「ふと所を誤れる」ものと述べていましたが、それは古今伝授説および契沖らの部立の考え方を前提として継承したための誤解です。この歌は、恋三のこの場所、「逢うよしなしに」のところにあるのにふさわしい作です。また、『古今和歌六帖』の「くれどあはず」にこの歌が入っているのも、業平の先の「秋の野に笹わけし朝の」の作、前述したように、かつては逢えたのに今は逢えなくなってしまったのを悲しむ歌がともに入っているので、それもまた当然のことなのです。

さて、契沖らの拒否説が誤りだとすると、顕昭・定家の理解が正しいということになるでしょうか。その説は、男が女に逢った、実事があったあとの歌とする点では正しいものです。

しかし、顕昭の注が「有明の月はあくるもしらず、つれなくみえし也」と、つれなく見えたのは月だとするのには問題があると思います。

次に、『古今集』の「つれなし」の例を集めてみました。傍線部に注意して、ざっとご覧下さい。

○恋一・五二〇（よみ人しらず）
来む世にも早や成りななむ目の前につれなき人を昔とおもはむ

○恋一・五六二（紀友則）
夕されば蛍より異に燃ゆれどもひかり見ねばや人のつれなき

○恋二・六〇一（ただみね）

風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か

○恋二・六〇二（ただみね）

月影にわが身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む

○恋五・七七〇（遍昭）

わが宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしまに

○恋五・八〇二（素性）

忘れ草なにをか種と思ひしはつれなき人の心なりけり

○恋五・八〇九（菅野忠臣）

つれなきを今は恋ひじとおもへども心よわくも落つる涙か

○雑歌上・八九八（よみ人しらず）

留めあへずむべもとしとは言はれけりしかもつれなく過ぐる齢か

○雑体・一〇四六（よみ人しらず）

鶯の去年の宿りのふるすとや我には人のつれなかるらむ

九首あげましたが、そのうち七首の歌に、「つれなき人」「人のつれなき」「つれなき君が心か」などと、「人」について「つれなき」ことが言われています。それ以外の二首でも、波線を施した箇所、「つれなきを今は恋ひじ」は「つれなき人を」の意味、「つれなく過ぐる齢か」は、年齢を擬人化した表現です。つまり九つの例、すべてが人の「つれなき」心を言う表現です。

そこから考えると、『古今集』の撰者のひとり、忠岑の歌の「つれなく見えし」も、これは「有あけの」を受けることから有明の月のつれなさを言うとともに、「つれなく見えし別れ」と下に続いて、相手の女が別れの時に何となく冷淡に見えたことを、むしろ強く表わす言葉になるのではないかと思います。

かつて逢って別れた、そのあかつきに、空の月がつれなく照っていたとともに、女もつれない様子であった。別れを惜しむ気持があまり感じられなかった。それ以来、逢えない夜が続く。もんもんと夜を過ごす男は、孤独なあかつきごとに、あの日の別れが、つらく思い出されると詠うのです。

もっとも、あかつきの別れは、和歌では恋の思いの極みを示すものとして描かれるのが常で、女が男を「つれなく」帰すことが詠われるのは珍しい例と言わなければなりません。しかし、たとえば、

『後撰和歌集』恋三・七八七に、

女のもとにまかりたるに「はや帰りね」とのみ言ひければ　　よみ人しらず

つれなきを思ひしのぶのさねかづら果てはくるをも厭ふなりけり

という歌があります。「早く帰って下さい」という女の言葉は穏やかではありません。しかし、それを忖度すれば、しのびの関係が露見するのを恐れて、人に見られないようにすぐに帰ってほしいと懇願する気持だったとも読みとれます。そして男は、それを「つれなき」さまと怨んだのでしょう。

また、『金葉和歌集』恋部上・三九二にも、

女のがりまかりたりけるに「今宵は帰りね」と申しければ帰りにけるのち、「ひと夜はいかが思ひし」など申したりければ言ひつかはしける　藤原正家朝臣

秋風に吹きかへされて葛の葉のいかに怨みしものとかは知る

とあります。あとになって女が「あの夜はどうお思いになりましたか」と気づかい問うているので、その夜は逢えない何かの事情があったのでしょう。それで「帰りね」と言った。男はおそらくそのことを承知しつつ、「秋風（あなたの厭き風）に吹き返されて」と怨みの心で答えたのだろうと思います。

そのような例を思えば、「有明のつれなく見えし別」れもまた、女が男を早く帰そうとして、心にもなく、そそくさと男を送り出したことを言ったのではないでしょうか。しかも、女には男を近づけてはならない事情が続いて、逢えないあかつきが重なった。男は、女がつれなく見えたその別れの時を思い出しつつ、日々のあかつきを辛く過ごしている……。

やや想像のまじる解釈となったかも知れませんが、そのような悲しい恋の歌と読んでよいと思います。

ところが、この「つれなし」という言葉の使い方は、時代とともに変化します。こんどは『新古今和歌集』の用例十七例（うち二例は詞書）を引いてみましょう。

○春上・一〇（源国信）
春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪

○春上・九八（藤原有家）
朝日かげにほへる山の桜花つれなくきえぬ雪かとぞみる

○夏・二〇九（藤原良経）
有明のつれなく見えし月はいでぬ山ほととぎす待つ夜ながらに

○夏・二三五（藤原定家）
五月雨の月はつれなき深山よりひとりもいづる時鳥か

な

○夏・二五九（源通光）
清見がた月はつれなき天の戸をまたでもしらむ浪の上かな

○秋・四三四（源通光）
さらにまた暮をたのめとあけにけり月はつれなき秋の夜の空

○哀傷・八四二（藤原忠経）
たれもみな涙の雨にせきかねぬ空もいかがはつれなかるべき

○羇旅・九三〇（橘為仲）
見しひともとふの浦風おとせぬにつれなくすめる秋のよの月

○恋一・一〇〇五
つれなく侍りける女に、しはすのつごもりにつかはしける　謙徳公（藤原伊尹）
あらたまの年にまかせて見るよりは我こそ越えめ逢坂の関

○恋二・一一〇三
大納言成通、文つかはしけれどつれなかりける女を、のちの世まで　うらみのこるべきよし申しければ　よみ人しらず
たまづさのかよふばかりになぐさめて後の世までのうらみのこすな

○恋二・一一二七（藤原実宗）
夢のうちに逢ふと見えつる寝覚めこそつれなきよりも袖はぬれけれ

○恋二・一一三八（藤原有家）
つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでじ有明の空

○恋四・一二七一（後鳥羽上皇）
わすらるる身をしる袖のむら雨につれなく山の月はいでけり

○恋四・一二八四（藤原定家）
松山と契りし人はつれなくて袖こすなみにのこる月かげ

○恋五・一四三一（よみ人しらず）
秋の田の穂向けの風のかたよりにわれは物おもふつれなきものを

○雑歌下・一七一三（冷泉院太皇太后宮）
つきもせぬ光のまにもまぎれなで老いてかへれる髪のつれなさ

○雑歌下・一八一八（西宮前左大臣）
光まつ枝にかかれる露の命きえはてねとや春のつれな

き

注意していただきたいのは、『古今集』ではそのほとんどの用例が恋の部に見られたのに、『新古今集』では、四季の部に多くの例（六例）が出てくることです。そして、波線のところをたどってください。「有明のつれなく見えし月」、「月はつれなき」が三例、羇旅の歌に「つれなくすめる秋のよの月」とあり、また恋の部にも「つれなく山の月はいでけり」と、月を「つれなし」と表現する歌が一気に増えるのです。それは、『千載集』までにはなかった傾向です。そこに、『新古今集』時代の新しい語感、あるいは月の見方が現れています。

『顕注密勘』の顕昭の注が「有明の月はあくるもしらず、つれなくみえし也」といい、定家がその意見に賛同して、この歌を絶讃した背景には、このような『新古今集』時代の新感覚が、おそらくはあったことでしょう。

歌の解釈は時代によって大きく変わります。この「有明のつれなくみえし別より」の歌も、『古今集』の歌としての意味と、『百人一首』に収められた歌として意味とは、まったく違ったものになりました。その相違を手がかりにすれば、人々の言葉、自然に対する感受性に時代的な変容のあったことを知る道もひらけるのではないでしょうか。

その意味でも、各時代の注釈書を広く集め、比べてみることが面白い。卒業研究の一つの方法として、ぜひともとお勧めしたいと思います。

附記　本稿は二〇一二年度佛教大学国語国文学会における講演の原稿を、特に後半部の不備を補いつつ修訂したものである。つたない話に熱心に耳を傾けてくれた学生諸君の顔を思い出しながら、講演の口調をあえて改めずに書き直した。